

## 第 34 回 胡蝶蘭の花芽

---

このところ例年 12 月になると、庭にある二本の松の雪釣りと金木犀の剪定のために植木職人を頼んでいる。いつもは 8 月に一度庭の手入れをするが、金木犀だけは秋の開花時期を過ぎてから 12 月の剪定作業となる。

冬枯れの雪の季節に拙宅の庭を彩るものは少ないが、そのためかたわわになった南天の実やサザンカの花がとくに映える。南天は竹の柵で支えながら成長するに任せているが、ここ数年は二階のベランダの高さで成長が止まっているようである。夜来の雪が止んだ朝など、陽が昇る頃窓越しに眺める景色は陽光のなかで、逆光が強い部分と光がまともに当たる部分とが鋭く際立った濃淡を示す実をつけた南天の姿や、半分雪をかぶった深紅色のサザンカの花が健気に冬の寒さに耐えている様子などが絵画的で印象深い。年末年始の頃の冬枯れの時期の梅は、まだ枝に多くのごく小粒な蕾をつけているだけだが、やがて訪れる早春を想起させる。

一方この季節になると、屋内では鉢植えの花、シクラメンや蘭などが比較的長い間目を楽しませてくれる。休日などに陽のあたる場所で身のまわりの花を眺めながら、とりとめのないことを次々と思いながら静かにひと時を過ごすのは、怠け者にとっては結構楽しい。

これまで多年草の鉢植えの花は、観賞後も次の年もまた同じように咲いてくれるようにと大切に丹念に世話してきたつもりであるが、必ずしも思ったようにはならなかった。シクラメンと胡蝶蘭は特に難しかった。蘭のなかではシンビジウムやデンドロビュームなどは数年に一度はなんとか花を咲かせることができているものが少しはあるが、それらのほとんどは途中で枯れてしまっている。胡蝶蘭はできるだけ陽のあたる場所に置き(このことがよくなかったらしい)、特別に大切に扱ってきたつもりであった。しかしながら毎年のように 1 月の終わり頃になると、4 枚ある葉のうち下側の方から霜焼のような状態が始まって、終にはそれが全てに及んで結局枯れてしまう、というようなことを繰り返してきた。寒さや高温に比較的強いとされる温帯型交配種の蘭でも、元来が熱帯アジアや東南アジア原産であるため、外気の影響を受けやすい日本家屋のなかでは冬の寒さに耐えられないのであろう。蘭は環境設定と水遣りのコツさえつかめばそれほど難しいものではないというが、工夫してもこれまで中々そこまでは到達できないでいる。嘗て千葉県佐原市(現在の香取市佐原)にあるつれあいの実家で、今は故人となった義母が温室のなかで何種類もの蘭を育てていたのを思い出すが、とくに冬の間は四六時中の温度管理にかなり注意していたようである。

胡蝶蘭の鉢に添えられている簡単な取り扱い要領には、花が終わってから茎を数節末梢で切っておくと、残った節から新しい芽が出るということが記されてあったが、何度も3~4節末梢で切ってみても一度もうまくいかなかった。ところが数年前の胡蝶蘭は花が終わってから5節目のところから新しい芽が出てきた。調べるとこれを高芽というそうで、8月頃になると確かに根のようなものも出てきた。しかしその扱い方がわからず、そのままにしておいたためか、一鉢の方の胡蝶蘭は枯れてしまった。もう一方では高芽は枯れてしまったが、4枚の葉のそばから新たな花芽が出てきて、10月頃に5輪ほどの小さな花をつけた。難しいといわれている胡蝶蘭に二度花が咲いたことに感激したものである。胡蝶蘭に関してはその環境設定と水遣りのコツを会得するのがかなり難物であるのは間違いない。

一方、最近医業から遠ざかって、これまで控えてきた趣味の方にも身を入れ始めた家内は鉢植えの花にも興味をもつようになった。胡蝶蘭の再生にも師匠がいる様子で、いとも簡単に花芽を作り、楽しんでいる。結局、蘭に関しては目下筆者が関与すべきところはなくなってきている。

かつてはそうでありたいと願ったこともある green thumb あるいは green finger と言われるような、花を咲かせることのできる達人を目指すには程遠いことを実感しているこの頃である。